平成１３年１２月１日発行

かまたし

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

第2号

わがまちの顔

染色作家　平野朱美さん

相生小学校出身で、蒲田で育った染色作家がいる。

古くから伝わる友禅の技法を駆使して、工芸美術の世界における『染色』に新風を巻き起こしている平野朱美女史である。

蒲田駅西口近くに彼女のアトリエがある。そこは彼女の自宅であり、大掛かりな設備は無いが大きな作品が創作される。

染めを自室で行ない、蒸しの作業でロケット状の巻き蒸し器を使っている。水元（友禅流し）には風呂場を使用。糸目糊はもち粉・糠などで出来ており、渋筒に先金をつけ、糊を置いていく。この道具は古来から使われていて今後生産・入手が困難となってくる物である。

工芸の世界が高齢化している現在、世代的にも若い彼女の作品は、人の心を一瞬にして掴む。そのアピール性は、どの会場でも彼女の作品と見分けられる程である。

それは、彼女が創る色調は、名前の通り「朱」を基調として、様々な微妙な色合いの紅・赤・緋・朱など「赤色」が染め上げられるからである。

自宅での商売を母の片腕として支える傍ら、大塚テキスタイルデザインで講師を勤める。そのような多忙な中で作品作りをしている。

美術展でいちど入賞してスポットを浴びてもその後の創作活動次第では忘れ去られてしまう時代、十数年の間、着実に作品を創り出し、結果を残していく作家は稀ではなかろうか。

〈日展会友・現代工芸本会員〉

好きなことに打ち込めることについて平野女史はこう語る。

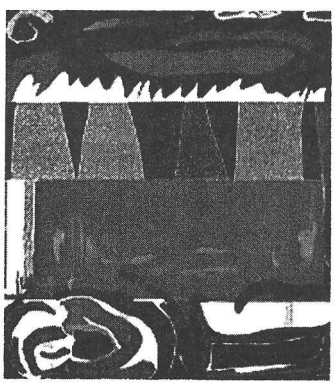
「個性を尊重しながら伸ばしてくれる先生に出会えたこと、七十・八十代になっても続けられる染色に出会えたことは私自身にとって運が良かった。」

物質的な不自由さがなくなってきた現代社会において、精神的に満たされるものに出会えたことは、平野女史の財産であろう。

古くから受け継がれてきた伝統・仕きたりを重んじるこの工芸の世界にも、わずかながら変化が見られるという。また、若い世代が少ないため、次代をリードする人を育てて行くことが課題であるようだ。

区民ホールアプリコの大ホールのどん帳には、川端龍子の「新樹の曲」が使われている。近い将来、区の施設にも、平野女史が染め上げた『朱色』がお目見えする日がくるかもしれない。

（取材 柳通・伊藤・事務局）



新世界

第三一回日展（一九九九）
一六〇×一四〇㎝

女塚伝説

プロローグ

NHKの大河ドラマ「北条時宗」をご覧になっている方は多いと思います。

二度にわたる蒙古軍襲来のため、鎌倉幕府は体力・資力ともに衰え、御家人達も大きな犠牲をはらったにもかかわらず、充分な恩賞をもらえずに不満が高まっていました。朝廷に政治の実権を取り戻そうと考えていた後醍醐天皇は、幕府の力が衰えたとみて討幕の計画を立て、関西では楠木正成らが、関東では足利尊氏や新田義貞らが天皇方につき、ついに鎌倉幕府は壊滅しました（一三三三年）。

しかし二年後には、自らが幕府管領の野望を抱く足利尊氏により京都は占領され、天皇政治はあっけなく崩壊しました。

尊氏は京都に別の天皇をたて（北朝）、後醍醐天皇は吉野に逃れて朝廷をひらきました（南朝）。北朝と南朝はそれぞれ全国の武士に呼びかけ、戦いはその後六十年間も続きました（南北朝の乱）。

新田義興と少将局

新田義貞の第二子である義興（一三三一～一三五八年）は、父・義貞亡き後は父の意志を継ぎ、南朝側に味方して足利尊氏と対戦し、一時は鎌倉をも領有するほど優勢でありました。

武蔵の国内での数度の対戦の後、越後に下り待機、再び軍勢を整え東国に戻りました。尊氏が没し、その息子基氏の時代になると義興勢の動きはますます活発となり、それを恐れた足利幕府の鎌倉管領、畠山国清は、父義貞の元家臣であった竹沢右京亮に義興暗殺をもちかけ、膨大な恩賞を条件に謀の約束が成立しました。

右京亮は、ひそかに京に人を遣り、公家の娘・少将局という美しく心の優しい女性を自分の養女とし、その後、義興に差し出しました。ややもすると、希薄な関係に成りつつあった義興との信頼関係を回復させました。

あるとき右京亮は一計をめぐらし、自分の館で月見の宴を催したいと義興に持ち掛けました。館の周囲には、ひそかに義興暗殺のため三百人の家来を配備し、義興の到着を待ち受けました。

義興が出立の直前に、異変を感じ取った少将局がいそぎ参上し、「昨夜、不吉な夢を見たので今日を含め七日間は外出を控えてください」と懇願し、義興は難を逃れました。

計画に失敗した右京亮は、同じ義興一党である江戸遠江守と相談し、自分たちの領土が畠山国清に没収されたとの偽りの訴えをし、義興に助けを求めてきました。求めに応じ、わずか十数名の従者を連れ、江戸・竹沢勢と合流し鎌倉に向け出立しました。

彼らが用意した船で矢口の渡を渡ったところ、あらかじめ穴をあけておいた船底の栓を抜かれました。沈みかけた船に江戸・竹沢勢は攻撃を仕掛け、義興と従者は壮烈な最期を遂げました。

これに先立ち、少将局に自分たちの企てを悟られたと気が付いた右京亮は、彼女たちを巧みに誘い出し、少将局とその侍女・従者を悉く殺害しました。

その亡骸は放置されたままだったので、村民たちが哀れんで手厚く葬り、塚をたてたと言われています。

女人を葬ったことから、「女塚」の地名がついたと言われています。

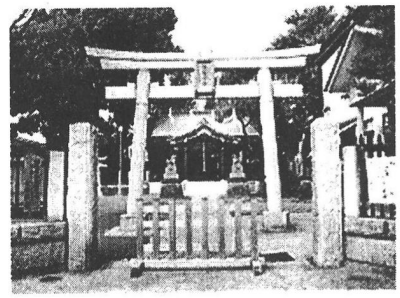
義興憤死の悲惨な模様は江戸時代になって平賀源内が、浄瑠璃「神霊矢口渡」として書き上げ、今日でも名作として多くの人に知られ、幾度も歌舞伎で上演されています。

女塚神社

義興に命をかけて忠節を尽くし殺されてしまった哀れな女性少将局は、義興を祀る新田神社から近い女塚神社に祀られています。現在も境内の一隅に塚があり、女塚霊神として祀られています。

またこの塚には、当地の長者の娘を葬った塚、旅の美しい婦人がこの地で没し、その婦人を葬った塚等の諸説もあります。

中でも有名なのが、前述の矢口の渡の新田義興にまつわる女人を葬ったことから女塚と称されたもので、少将局とこの女塚に関わる説は広く世に紹介されています。



女塚神社

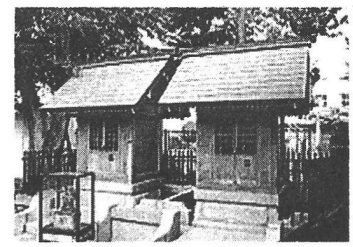
女塚神社境内には、白山社と稲荷神社が祀られてあり、白山社は健康の神、特に歯の神様と言われて、毎年五月一五日に氏子の健康を願って例祭を行なっています。

また稲荷神社は農業の神様で、農地が財産であったことから財産の守護神となり、商売繁盛の神として毎年二月の初午祭には信仰を集めています。

女塚神社は、以前は八幡社と称して女塚村（ＪＲ蒲田駅東口付近）に鎮座していましたが、明治五年、京浜間に鉄道が敷設されるために自然の美しさが損なわれ、祭典に不便を来たすに至り、明治二一年、現在地（西蒲田六丁目二二番一号）に神を移し、女塚神社と改称されました。

是非一度、女塚神社へ。

（取材 大澤・石渡・柏村）



稲荷神社・白山社

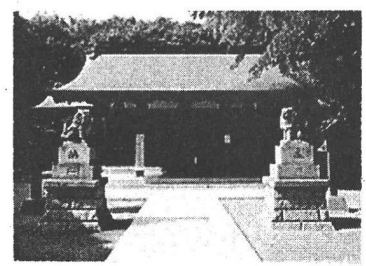
付近縁故の古跡

新田神社

矢口一―二一―一三

足利基氏の執事である畠山国清、江戸遠江守、竹沢右京亮らの卑怯な謀略により、多摩川矢口の渡で壮烈な最期を遂げた後、義興公の怨霊が現れ祟りを及ぼしたり、夜夜、火の玉が現れて人々を悩ますようになりました。

そこで義興公の御霊を鎮めるために、墳墓の前に社殿が建てられました。



新田神社

十寄神社

矢口二―一七―二八

竹沢右京亮らに謀られ、多摩川矢口の渡で命を落とした、義興公の近習の将兵十数名のうち、世良田義周以下十名を祀る

妙蓮三体地蔵尊

下丸子二―一―八

矢口の渡にて、義興公に殉じた土肥三郎左衛門以下三名を祀る

頓兵衛地蔵

下丸子一―一―一九

悪計に加担した渡し守の船頭が後に前非を悔い、この地蔵尊を建立し義興公の冥福を祈願したと伝えられる

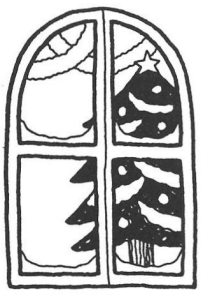
矢口の渡

矢口の渡の跡地は区内最期の渡し場として残っていたが、昭和二四年に多摩川大橋が完成して廃止となる

編集委員紹介

各自治会・町会から推薦された地域情報紙「かまにし17」の編集委員を紹介します。

西蒲田一　石渡咲子　柏村　茂
西蒲田二三　望月治次　瀬川二三
西蒲田四　宮下志富
西蒲田女塚　大澤麻純　杉野英雄
西蒲田六　大村　弘　伊藤多佳子
蒲田西口　柳通勝磨　山田誠一
西蒲田七　飯嶋宏之　小山稚子
西蒲田八　竹内喜八郎
御園　川名重士
新蒲田一　佐藤清子　西川美津代
東矢口一　山崎修弘
小林　鏑木　芳
安方北　高橋晴美　福士靖史
安方南　都築保二　江尻雅樹
多摩川二　市石詔子　滝口時春
道塚　加藤秀一　富田はつえ
トミン多二　宮腰義昭　高橋俊江



わが町会の生い立ちと自慢

西蒲田一丁目町会長
諸我　三男次

私たちの町会の事務所は第二次大戦中、女塚小学校の裏にありました。

昭和二〇年四月一五日、五月二七日の空襲で町会事務所、女塚小学校をはじめ、町の半分以上が焼失しました。

その中でも、配給・防災・被災者の救護など町会の事務を一日もストップさせることが出来ず、二回にわたり事務所を移転して、困難な運営を続けてきたそうです。

しかし、昭和二二年の政令十五号により町会は解散となりました。

その後、女塚一丁目文化会を設立しましたが、これも区当局の注意により、名称を女塚一丁目街灯愛護会と改めました。

昭和二三年には蒲田防犯協会女塚一丁目支部となり、街灯の維持、日赤奉仕団の運営に当たりました。

昭和二八年には区当局より、町会復活の要望もあり、女塚一丁目親和会の誕生となりました。

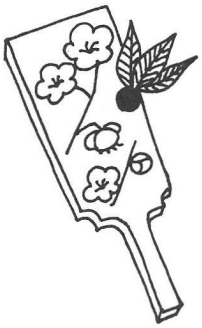
翌二九年には、旧親和会館が建設され、神輿、曳太鼓を新調し、昭和三一年に子供神輿を新調しました。また、昭和三三年には火災報知機などを設置し、その進歩発展は目覚しいものだったそうです。

昭和三五年、会長に宮崎市太郎氏が就任し、約四〇年の永きにわたり勤めました。

宮崎会長就任中、昭和五九年七月、現在の親和会館が新築されました。この親和会館は一階が一丁目町会、二階を四丁目町会がそれぞれ町会会館として使用しており、他地区では類の無い仲良し町会だと私どもは自負しております。

平成十一年四月より、私、諸我が町会長に就任しました。

これからも、信頼・連帯・協調をモットーに、町会の皆様のお力添えと、役員の方々のご協力で、明るい住み良い町づくりを目指して、努力してまいります。



事務局からのお知らせ

「かまにし17」創刊号発行後、読者の皆様から数多くのご意見・ご感想をいただき、誠にありがとうございました。編集にあたり参考とさせていただきます。

これからもお気付きの点がございましたら、事務局までご意見をお寄せください。

今回一面で紹介しました染色作家・平野朱美さんの作品数点を拝借し、蒲田西特別出張所一階に展示します。

出張所にお立ち寄りの際は、印刷ではお伝えすることの出来ない鮮やかな色合いを、是非、ご覧ください。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，537人
	女	27，242人
	計	56，779人
世帯		28，429世帯

平成13年10月1日現在

編集後記

第二号より、一面を「かまにし17」の居住者、あるいは出身者で、各界において活躍なさっている方にスポットを当てました。個性的で読みごたえのある記事をお読みください。

今回の二・三面は女塚霊神物語を特集しました。

神社の夏祭りでは、日中お神輿が町会を練り歩きます。夜は太鼓の音や懐かしい民謡に合わせ、境内いっぱいの大きな輪になって盆踊りを楽しみ、近隣の皆様と平和を享受しております。

そんな時、心の片隅で戦乱の中で儚く散った幼い少将局の悲しい物語を思い出せば、より一層の平和の幸福を感じます。

ご多忙な師走のひと時、手を休めて「かまにし17」を読んで頂ければ編集に携わった私たちにも更なる意欲が生まれます。

来年も良い年であります様に。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局
蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
三七三二―四七八五